
CANDY POP

川和真之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CANDY POP

【Nコード】

N6802P

【作者名】

川和真之

【あらすじ】

「もう、考えるのも嫌だよ」

大学生の佐々木奈緒子は、現在就職活動中なのだが、一向に内定を獲得出来ずにいた。税理士になるという夢を忘れて、そこそこの大学生生活を満喫していたツケが回ってきたのだろうか。そんな時、高校時代のバンドメンバーであった由希と3年振りに再会することになり…。

夢をテーマに書いた、心温まる友情物語です。

第一章 リクルート

「小学4年生の時の遠足で動物園に行った時の話ですが、お昼御飯後のおやつを持ってくるのを忘れてしまった女の子がいました。もの静かなその子は、一人ぼっちになっていました。小学生の頃の私は人見知りが激しくて、なかなか声をかけられなかったのですが、当時新発売だった元氣チョコスティック、しかも「いちご味」を片手に、勇気を振り絞って声をかけたのです。この出来事をきっかけに、その子とは高校生の時に一緒にバンド活動をするほどの親友になりました。人と人との心の架け橋となる力がある商品を創造する御社で、私は是非働きたいです」

いいじゃん！私は、心の中でガッツポーズをした。お菓子メーカーである高島製菓にまつわるエピソードは、ちゃんと事前に考えて暗記してきたのだ。まして、当時の社長、高島忠雄が考案し、想い入れが尋常ではないと言われている元氣チョコスティック（いちご味）は、人気はないものの10年以上たった今も生き延びているロングセラー商品である。

しかも今日は、はつきりと、ただし毅然とした態度にならないような落ち着いたスピードで採用面接官に語りかけることが出来ている。もともと、緊張には強い方で、面接は得意なはずなのだ。いまだに内定をもらえずにいるのが不思議なくらいだ。この高島製菓はついに最終面接まで登りつめている。あとちょっと、あとちょっとなのだ。

「なるほど。佐々木奈緒子さんは弊社の製品に強い想いがあるんですね」

進行役である、細身の面接官がにこやかに私に笑みを向ける。私も負けずに笑顔を作る。

「佐々木さんは、職種は経理志望か。営業ではなくて、何故経理なの?? そのような想いがあるのなら、新製品開発部とか、営業とか、商品に関わる方を志望するものなんだが」

中央に座っている、人事部長が質問を飛ばしてきた。ついにきた。心臓の回転が加速し始めたことが、はつきりとわかった。もう60歳を過ぎているだろうに、この人事部長は、紺ベースに白のストライプの入った派手なスーツを着ている。ネクタイは真っ赤だ。私は、こういうガラガラした人は苦手なタイプだ。なんだか、責められている気分になってしまふのだ。しかも、よりによって回答に苦慮しているこの質問をしてくる。

「父が…ですね。お金にまつわる仕事をしておりまして、母もその仕事を手伝っております。私は父の仕事ぶりを尊敬しております…」

「お金にまつわる仕事? お父さんはどこかの経理部で働いている方なの?」

私の父は税理士事務所を開いている税理士で、かくいう私も将来税理士になりたいという気持ちはまだ残っている。「父の事務所を継ぎたい」これが、私の夢だった。本音を言えば、仕事をしながら勉強をして、試験に合格出来なかったら仕事を続けていこうかなと考えているのだが、そんなことを面接では言えない。でも、私は嘘をつくのが嫌いなのだ。

「父は税理士をしておりまして…」

私の声は、知らず知らずに語尾が小さくなっていた。

「税理士さんなのか。すごい立派じゃないか。突然自信なさげになったから、借金の取り立ての仕事か何かと思ったよ」

笑いがどつと起きた。私も合わせて、愛想笑いを浮かべた。でも変だ。いつもなら、ここから事務所を継ぐ継がないという話になってしまい、話が拗れてしまうのだが。

尊敬出来る人が近くにいる事は人生において非常に重要だと、満足げに語った人事部長は、さっさと次の質問に移ってしまった。なんだかすつきりしない。上手にかわす答えを必死に用意してきたのに、これでは出番がないじゃないか。

その後も順調に面接は進んでいった。問われた質問は、例えば、一番の挫折経験は何ですかとか、座右の銘はなんですかとか、結婚したら仕事は続けますかなど、就職活動の面接として、オーソドックスなものが大半を占めた。自分としては、今までの面接の中では一番の出来だった。そして、最後の時間がやってきた。

「では、佐々木さん。こちらから聞きたいことは以上ですが、逆に何か佐々木さんから質問はございませんか？些細なことでも、なんでもいいですよ」

質問コーナー。就職活動の面接は、必ずと言っていいほど、この学生側からの質問で締めくくられる。これで気を抜いてしまい、「社員食堂はおいしいですか？」などと聞いたら幾度となく通った不合格への道が待っている。質問はありませんもタブーだ。どの様な核心を突くような質問をしてくるのか、面接官はみているのだ。

そう心では分かっているけど、私はこのままでは面接は終われなかった。今まで避けてほしいとしか感じたことのなかった税理士の話題を、一度もされないことが、こんなにもすっきりしないなんて思ってもいなかった。

「あの、私の実家は税理事務所を開いていると先ほど申しましたが、その事務所を継がないのかという質問はしないのですか？初めてその類の質問をされなかったのですが…」

私は、先ほどのように少しおどおどしながらも、気持ちを込めて言葉が続けた。一瞬で、空気が変わったような気がした。この質問は、取りようによっては、私は途中で会社を辞めますよと言っているようなものだ。

この面接で、初めて訪れた気まずい沈黙の時間。その空間を打破しようとして一人の面接官が何か言おうとした時、遮ってさっきの人事部長の口が開いた。腕を組み直し、歪んでいる人事部長の表情が、遠くぼつんと離れた私の席のところまで伝わってくる。

「君ねえ。学生時代に勉学に真剣に取り組んだのかい？？サークル活動に現をぬかしていたんだろ？？そりゃあ、大学時代に資格勉強に真面目に取り組んでいて、すでに試験に合格しているのならその質問をするだろう。しかし、君はどうだ。何もしてきていないじゃないか。最終面接まで上り詰めてきた能力は認めよう。最終面接の受け答えからも、自ら考える力があることは分かった。でもね、実際に行動する力がないとダメなんだよ。弊社の仕事は新入社員には非常に厳しく難しいものだ。学生時代に両立出来なかった人間が、社会人になって両立できるとは到底思えないね」

人事部長が呆れ返った声で、説教染みた言葉続けている間、私は黙ってしまっていた。反論したくても出来なかった。自分自身を俯瞰してみると、まるで萎れてしゅるると小さくなったキャベツのようだ。

何か答えなくては、言い返さなくてはと思うのに、うまく言葉が出てこない。結局、おもわず「ごめんなさい」と謝ってしまった私は、その場で今にも泣き出しそうになっていた。

慌てた他の面接官からは、現代には珍しい非常に素直な子だという評価を頂くことになったのだが、私は最後の挨拶の時も、人事部長の方に顔を向けることが出来なかった。

高島製菓の本社ビルを出た後、1Kの狭い一人暮らしの家に帰るまでの間はなんとか我慢していたが、玄関に足を踏み入れた瞬間に涙が溢れだし、私は勢いよくベツトに倒れこんだ。

ひどいことをされたなんて思っていない。人事部長に一言も言い返せなかった自分が悔しかった。あの人の言う通りだ。私の大学生活は、なんだったのだろう。

日々なんとなく大学生活を過ごして来たけど、ついに就職活動という悪魔がやってきて、いままでの学生生活の成果を執拗に求められている私は、右往左往している就活生の日本代表選手のような人間だ。

本当に悔しい。この感情はなんなのだろう。どうして、こんなに馬鹿にされないといけないのだ。

私だって、大学1年生のときは、勉強に燃えていたのだ。父親の事

務所を継ぎたくて、東京の大学で勉強して、学生中に絶対に資格を取ると豪語して進学したのだ。当然、資格取得のためのサークルにも入ろうと思っていたのだ。

私の大学には、本棟から離れたところに通称「昭和の置き土産」と呼ばれるサークル棟があつて、それはもう廃棄物処理場のような様相であつて、割れたブラウン管のテレビ、びしょぬれのソファ、錆びきったトランペットなどがそこらじゅうに散乱している。

喧騒が聞こえてくるこの空間は、遊びほうける学生の格好の住処となつていて、高校卒業したばかりの私にとって、明るい華の学園生活ライフを思い描かせるには十分の匂いをももし出していた。

当時の私は、そのサークル棟の、4階建てのちょうど真ん中、2階の隅っこにある「財務・会計徹底討論研究会」に、加速がとまらない鼓動と、華の学園生活の期待をかかえて恐る恐るドアを開いた。

しかし、そこには現実おるか、現実を超えた別の夢の世界が待っていた。中肉中背の男が素っ裸で立っていたのだ。どうも、お着替え中だったらしい。彼は、男とは思えない甲高い声で叫んだ。それはこの世の終わりの断末魔のようだった。

ノックをしないでドアを開けた私にも非があつたことは認めよう。でも、叫びたいのはこっちだ。私は、非礼を詫びる挨拶をし終わる前に、ドアを力強く閉め、一目散にこの場所から逃げ出した。おそらくあつたであろう有名著書の書籍の数々、討論に使う歴史のつまつたホワイトボード、書き込みの詰まつたレジュメは記憶の隅にすらない。あの裸男の、こちらを見つめる恐怖に怯えた目が今でも焼きついていてる。

「あの、裸男のせいだ」

枕元にある、暇つぶしのためにゲームセンターに入って獲得したぬいぐるみを、私はおもい切り投げつけた。くまのぬいぐるみは、大きな弧を描き壁にぶつかつた後、ころんと、仰向けに床に転げ落ちた。可愛らしいつぶらな瞳をしたくまさんは、何か言いたそうにこちらを見ている。

ぬいぐるみの視線すら痛いなんて、一体私はなんなのだ。どうしてぬいぐるみにまで同情されなくてはいけないのだ。

もう、考えるのも嫌だよ。

私はスーツを着たそのままの格好で目を瞑り、全てのことを忘れようと夢の世界に飛びだつことにした。

数日後、パソコンを開き就活サイトを見てみると、当然といえば当然なのだが、最後の砦だった高島製菓の最終面接の不合格通知が届いていた。私は改めて途方に暮れた。面接直後は落ち込んだ私だったが、類をみない展開になりひょっとしたら合格なんじゃないかと高をくくっていたのだが、世の中はそんなに甘くないらしい。

「いつになったらこの就職活動は終わるんだろう…」

いつもより大分低い声でぼそりと呟きながら、私は今まで絶対に手を付けなかった地元企業の説明会の予約をすることにした。

第二章 パーティ

数日後、私は、地元に戻るために新幹線に乗った。就職活動が不発に終わり、本当は東京で仕事をしたいのに、地元の企業も視野にいないといけない、危機的状況に追い詰められたためだ。私の実家までは片道4時間。大学の友達にはどうして飛行機で帰らないのかと不思議な顔をされるけれど、これには本当にうんざりしてしまう。

大抵の地方空港は、中心都市から距離が離れているのだ。私の地元もその例外ではなく、山の中にぽつんと空港がある。実に、中心街からバスで2時間である。残念ながら新幹線で帰る方が早いため、私は新幹線をごひいきにさせてもらっている。最初は、埋立地を作って、都市の近くに作る計画があがったらしいけれど、地元猟師さんの猛反対によりお流れになったことが、私の記憶の中にほんのりと残っている。

読み途中だった小説も読み終わり、景色を見ようにも新幹線は基本的にトンネルだ。しかも、今日は曇り。ますます私の気持ちも縮んでしまふ。今は、携帯でゲームをしているのだけれど、電波が悪くてスムーズに更新してくれない。すごく単純なRPGで、地下に進むにつれて敵が強くなっていく。

これは、大学の友達の綾が教えてくれたゲームで、マクロ経済学の講義中に必ずやっているライフワークだ。クラスメイトの綾とどっちが先にクリア出来るか勝負していて、本当は講義中しかゲームを進めてはいけないことになっているが、少しずるしたってかまわないだろう。勝った方が、学食のランチを奢ることになっている。

私は、一向にデータ更新されないゲームに嫌気がさし、携帯を茶色

のポーチに投げ入れた。ああ、本当に、実家に帰りたくない。お父さんに将来の話を触れられるのが怖くて、お父さんをさけている自分がいる。地元が、非常に帰り辛い空間になってしまっているのだ。今回は、高校の時仲良しだった由希にも久しぶりに会う。あれだけ仲良しだったのに、全然会わなくなってしまった。

上京した最初の頃は、メールで連絡を取り合っていたが、生活が全く違うからだろうか。自然と疎遠になってしまっていた。由希は、母子家庭で貧しくて、昔はすごい暗い子だったけれど、高校の後半では怒涛の活躍を見せることになる。

4時間の長い長い、そして退屈な旅も終わり、私は地元の街にたどりついた。夕方とはいえ、夏が間近にせまっていることを感じさせる少し潤った空気感だ。この季節特有の、懐かしい匂いが、私の心を満たす。なんだかんだ、私は東京よりゆっくり流れる地元の方が好きらしい。

私の家は、駅から歩いて20分。地方都市とは不思議で、駅から少し離れたところに街の中心が存在する。北に聳え立つ山の麓にあるので、徒歩20分とはいえ決して便利な好立地とはいえないのだ。

「奈緒子！おかえり！」

家に着くと、私が中学校の時に家庭科の授業で作ったエプロンをつけた母さんが、満面の笑みで迎えてくれた。何かと理由をつけて実家に帰らない私を、暖かく迎えてもらう度、感謝する気持ちは芽生えるのだが、必要以上の質問攻めにあうとすぐにこの感情はしぼんでしまう。きっと、一人娘が心配なのだろう。もしくは、まだまだ大人と認めてもらえてない証拠かもしれない。父さんはまだ事務所

にいるみたいだ。私の家と事務所は隣同士だけれど、一旦外に出ないと行き来できない設計になっている。

母さんの熱烈な質問攻めも落ち着き、私は由希の家に行くことにした。成人式すら出席しなかった私は、由希に会うのは実に3年振りだ。私の家から自転車で15分。高校生の時、数え切れないほど尋ねたこの家も、ひどく懐かしく思える。

今にも崩れそうな玄関の柱。ちょっとでも強い風が吹いたら飛んでいきそうな屋根。今私の住んでいる東京の街には、こんな家はないなど、少し冷めた思いで見ている自分がいることに気づき、そんな自分を恥じた。

インターフォンを押すと、うまく力を入れないと開かない玄関ががりりと音を立てて開き、由希がひょっこりと顔を出した。モノトーン系の色彩でそろえているところが由希らしいけど、由希の愛らしい笑顔に合うワンピースを着こなしている。こんなオシャレするようになったのか。薄いけれど化粧もしていて、ピンクのリップグロスをしている。

「ちょっとやめてよ、私は一旦家に帰ってシャワーを浴びてきたから、半分パジャマみたいな格好なのよ。ノーメイクだし。なんで由希はオシャレして出てくるのよ」

私は、おばあちゃんから貰った就寝用のジャージ（一応弁解しておくが、控えめなピンク色で可愛いと私は思っている）であることを笑いながら説明すると、それはあんまりでしょと、由希もつられて笑った。

なんてことはない、確かに3年近く会っていなかったけれど、私た

ちには今まで積み重ねてきた歴史があるのだ。

「そういえば、連れて行きたいお店ってどんなところ？」

私の自転車に由希を乗せて、町に向かって進んでいく。今回、一緒に飲もうと誘ったのは私だけど、お店は地元に残っている由希が決めることになっていた。

「ほら、奈緒ちゃんが行きたいって言ってた居酒屋はちべえ。覚えていたでしょ??あそこ、美味しかったんだよ。」

「ああ、はちべえ!あれまだ潰れてなかったんだ!」

はちべえとは、高校の裏門から出たところにある、小さな公園のそばにある年季の入った居酒屋のことだ。私も由希も、高校時代はテニス部に所属していた。部活の帰りに、嫌なことがあった日は二人で公園のベンチで語り合っていたのだけれど、そのベンチからよくはちべえの明かりが見えたのだ。

「なんだかんだ、お客が入っていて、気になっていたよね」

「そうそう、当時は私たちはお酒が飲めないから、ベンチで代わりにコーラで乾杯してたじゃん」

「由希はコーラが好きだったよね。夏祭りの味がするって。コーラを飲みながら心地よい風を受けると、確かにそんな気分したなあ」

思い出話で、二人の声が弾む。私の腰に落ちないように抱きついてる由希の緊張が、少しづつだがほぐれていくのが分かった。

家から自転車で約30分。私達の高校は不便で、バス通学か自転車通学のどちらかだった。由希も自転車を持っているのに、こうやってたまに二人乗りで通って、行き帰りに互いの相談話をするのが二人とも好きだった。

そういえば、自転車で長距離を走るのさえ、私にとっては久しぶりのことだった。部活帰りの蒸し暑さを感じさせる汗が、私の頬を垂れた。そんな一つ一つのことさえ、なんだか懐かしい気持ちにさせてくれる。

はちべえに着いた私たちは、当時の思い出話で大いに盛り上がった。テニス部の引退試合の打ち上げで行ったカラオケで、由希が歌った。その歌声にみんながびっくりしたこと。その時に参加していた、出席日数が足りなくて留年の危機の陥っていた後輩の杉山くんが、ヴォーカルをやってくれと告白するかのようをお願いしてきたこと。その問題児杉山くんとその仲間達に混じって、私達二人がバンドに参加したこと。そして、学園祭のライブで最優秀賞を貰ったこと。高校三年生の時のバンドの思い出は、私達二人にとっては青春時代そのものだった。

「最初は、杉山くん達三人に由希が加わって、4人組のバンドの予定だったのよね」

「でもそれは嫌だって言ったんだよね。だって当時私達は受験生でさ、みんな部活を引退してるのに、また私だけそんなことしてたらますます浮いた存在じゃない。まして、問題児の杉山君でしょう」

私達の緑が丘高校は県内でも有数の進学校で、高校三年生はみんな部活を引退していて、勉強に専念していたのだ。そんな中、由希を

誘ってきた杉山くんも杉山くんだが、誘いに乗った由希も由希だ。

「キーボードの私と、ヴォーカルの由希がだけが女の子。しかも3年生。今思い出しても、よそから見れば異色の組み合わせだったろうねえ。そういえば、どうしてOKしたの？由希は元々唄がすごく上手だったけどさ。杉山君に気があったとか？」

「違います。杉山くんは今でもお友達。むしろ奈緒ちゃんの方が仲良かったじゃんよ」

私は、げーっという苦い顔をして見せた。

「毎日喧嘩してたよね。杉山くんが学園祭の直前の練習にバイトで練習に遅刻してきた時、啖呵切って練習場所に入れさせなかったよね。私、あれがっこいいって感動しちゃった。」

「すぐ練習サボるし、私のお菓子勝手に食べるし、宿題やってこないし…」

私はまるで昔のように、杉山くんに対する愚痴が溢れだしてきた。

まるでお母さんみたいだったとはしゃぐ由希も、高校生に戻ったような表情をする。みんなに愛させる笑顔。こんな笑顔が出来るようになったのは、由希がバンドを始めてからだだった。それだけでも、バンドをやった意味はあったと、今でもたまに思うのだ。

「でも、あれは嬉しかったよ！お母さんが病気になったときみんなでお見舞いに来てくれたこと」

そういえば、由希のお母さんのお見舞いは杉山くんが発案者だった。

母子家庭である由希は、病気がちの母をすごく大切にしていた、そのために学校を休むことも躊躇わなかった。だから、必然的に由希自身も学校を休みがちであり、それがクラスになじめない一因だったのだが、杉山くんが楽器を持って由希の家に行くことを提案したのだ。

「あれは絶対に近所迷惑だったと思うけど」

常識ある他のメンバーは、各々家から探し出してきた宝物（私は、家族で旅行に行った時に買って使っていなかったマグカップだったと思う）を片手に由希の家に向かったのだが、杉山くんはベースを絶対に持つていくと聞く耳を持たなかったのだ。

「杉山くんはアンプまで持ってきたからね。私も、負けずと大声で歌ったから、ご近所さんにはさぞかし騒がしい夜だっただろうね。でも、本当に気持ちよかった。お母さんもあの時が私の歌を聞いたのは初めてだったし、人のために歌うつてことがあんなに気持ちがいいことだなんて、私知らなかったから」

由希の心がはずむ。

「感動して泣くお母さんに向かって、杉山くんはこう言ったのよね。『音楽は素晴らしい！音楽が、僕と由希先輩を繋いでくれたんです。ここにいる仲間達もそうです。今ここで、お母さんに音楽を届けていることだって、音楽がなければ実現しなかったこと。音楽には世界を変える力があります！』ってね」

「本当よく言うよね、練習サボる癖に」

困った顔をしたつもりだったが、私は笑っていた。つられるように、

由希も笑った。

「でも由希が音楽で変わったのは事実かな。いい意味でね。杉山くんに誘われた時、断るかと思ってたから、由希がOKしたのには驚いたな。よく決断したと思うよ」

由希は恥ずかしそうに、当時のことを思い浮かべている。はちべえ特製梅酒のアルコールが、私の中に染み込んでいくのがよく分かる。

「やっぱり必要とされたことが嬉しかったんだよ。ほら、私って当時友達に奈緒ちゃんしかいなかったじゃん。だからね、杉山くんの気持ちに素直に嬉しかった。あとね、カラオケで歌ったとき、みんな笑顔で私の事を見てくれていたんだよ。テニス部の子達が、そんな目で私を見てきたのは初めてだった。私の言語は、喋ることじゃなくて、歌うことなんじゃないかなって思ったわけ」

そういえば、そんな理由だった気がする。みんなを見返せるかもしれないと、やたらやる気になっていた当時の由希が脳裏に浮かんできた。しかもそれは、テニス部の仲間への敵対心にはならず、友情を芽生えさすものへと変化していったのだ。

私達のバンド（ちなみにバンド名はキャサリンで、由来は杉山君ちで買ってる亀の名前だ）が学園祭で最優秀賞を取ったのも、観客の投票で決まる仕組みの中で、クラスの友達とテニス部の仲間がわざわざ聞きに来てくれて、清き一票を投じてくれたからであった。

みんなの気持ちを晴れやかにする、そんな力が由希の唄には間違いなくあったのだ。

「そのお礼の為に作った受験応援ソングは大好評だったよね」

昔流行した「それが大事」という曲を、かつてに緑高風にアレンジして歌い上げた曲をCDにして、投票してくれた受験生に配ったのだ。これがすごい好評で、そこ頃には、由希は進学することを辞めて音楽をやる事に決めていたが、その決断に仲間達は白い目を向けずに応援してくれていた。

私の卒業と杉山君たちの引退のために解散することになったキャサリンの解散ライブも、大勢の仲間達が駆けつけてくれた。プレゼントされた持ちきれない花束を抱え、泣きじゃくりながら歌う由希の最後の歌声を、私も側で泣きながら聞いていたことを今でもよく覚えてる。

「本当に楽しい一年間だったなあ。期間限定だったけど、夢のような時間だった」

「でもさ、ずっとバンド活動を続けようって一度も私達を誘わなかったよね。私達じゃ役不足だったのかな」

私が笑いながら冗談半分にそういうと、由希は少し真剣な目をこちらに向けて来た。

「誘えるわけがないじゃんよ。だって、奈緒ちゃんには、お父さんの税理士事務所を継ぐっていう昔からの夢があったじゃない。現役で、難しい大学にも合格したしさ、すごいなって本当に尊敬してたんだよ？そうそう、最近はお勉強のほうはどうなの？？私は詳しいことは分からないけど、難しい試験に合格しないといけないんだよね？」

すっと、深く針で刺されたような気分になる。一気に現実突き戻

された私は、急激に声の調子が悪くなったようだ。

「税理士はね、弁護士さんと違って、若い人がすぐになる仕事じゃないんだよね。だから、試験の勉強もまだしてないよ。まずは、普通の企業に就職して実務経験を積むつもり」

由希が、キラキラした目でこっちを見てくる。その視線に、私はすごく心苦しさを感じてしまう。

「そうなんだね！じゃあ、奈緒ちゃんは、来年からOLさん？東京でOLって、よくテレビで出てくる丸の内OLってやつだね？？毎日オシャレな場所でランチとかするのかなあ。なんだか憧れちゃうなあ」

「いやいや、そんなんじゃないよ。もっと地味だよ、あれは、テレビ用に強調されてるだけだって」

「でも、奈緒ちゃんのことだから、きっとすごい有名な企業に入社するんでしょう？？なんの会社？？奈緒ちゃんの好きな、お菓子の会社とか？」

「別に何でもいいじゃんよ！」

辺りが一瞬、静かになったような気がした。また、すぐに居酒屋ならではの喧騒が戻ってきたが、目の前には怯えたような由希の姿があった。

「そんな、そんな怖い顔をしなくてもいいじゃんよ。私は、奈緒ちゃんを目指して頑張ってきたんだよ？」

怖い顔になっていたのか。そんな自分の顔を想像して、私はますます気持ちが沈んできてしまう。

「私は高校卒業したら、ただのフリーターだったでしょ。歌詞は私で作っていたけどさ、作曲は杉山くんだったじゃない。ギターもそんなに上手じゃなかったから、まずはギターの練習と、作曲の勉強をしたんだよ。HPも作って、小さなバーで歌うようになったんだよ。私は、お酒はあんまり飲めないけどね。あとね、土曜日には、商店街で路上ライブを必ずやるようにしたんだ。今は、レコーディングをしてね、CDも作ったんだよ。50人くらいの人が買ってくれてね。日々聞いてくれている人がいると思うと本当に嬉しくって、すごく幸せなの。今度、初めてワンマンライブやるんだよ。みんなに感謝の気持ちをもって開くの。奈緒ちゃんにも来てほしくて、今日フライヤーを持ってきたんだよ」

由希は、慌てて今の近況を話始めた。でも、それが私の今の心情では、とても共感してあげる余裕がなかった。

「私にはそんな時間ないよ。由希もさ、いつまで遊んでいるのよ。先のこと考えているの？女手一人で育ててくれたお母さんは、理解を示してくれてるの？？昔みたいに、突っ走って周りが見えてないんじゃないの？」

私は、なんて最低なことを言っているんだ。最低なことを言っていることは理解出来るのに、気持ちがどうしてもセーブ出来ない。

「そっか、奈緒ちゃん忙しいもんね。うん。確かに私、お母さんのこと考えてなかったかも。ありがとね」

その後、私達はちびちびと残りのお酒を飲み干し、すっかり酔いも

醒めてしまい、はちべえを後にした。目の前の公園のベンチで語る予定も、なかった事になってしまい、来た川沿いを自転車で駆け抜けた。

残暑のジメジメした空気が、行きとは別に私達の重苦しさを助長するかのよう押し寄せてきた。

別れ際に、笑顔を作って御礼の挨拶をしたけれど、私の顔はぎこちなかったかもしれない。すぐに自分の部屋に入り、ベッドの上に横たわった。私って、こんなに感情的だったろうか。やはり、疲れているのだろうか。見えない未来。私は、一体何がしたいのだろう。

「もう、考えるのも嫌だよ。最近、こんなことばかりだ」

私はそのままの格好で目を瞑り、全てのことを忘れようと夢の世界に飛びだつことにした。

第三章 ライフ

これは、喧嘩別れというのだろうか。

由希と再会を果たした次の日に、逃げるように東京に戻った私は、晴れない梅雨空のような湿った心から抜け出せずにいた。

大学生にもなって、何をしているんだろう。罪悪感が私を容赦なく攻めてくる。今や、私の方が子供だということか。憂鬱な心の靄を打破しようと携帯電話に手を伸ばしたが、由希のダイヤルを押すことが出来なかった。由希が再会した次の日の朝にわざわざ送ってくれた、感謝の気持ちのこもったメールにも返信出来ずにいた。

今更、何を言えがいいのだろう。ごめんなさいって、謝ればいいのかな。その次の言葉が、私にはどうしても見つけることが出来なかった。

どう考えても、由希に非があるとは思えない。そのくらい私にだって分かる。悪いのは一方的に私の方だ。ただ、今の私には、由希が、あまりにも眩し過ぎる存在に思えた。全く違う世界の住人のように思えた。

さぞかし、私のことをダメな人間だと思っただろう。夢のない、つまらない人だと。

その後、9月に入ってから就職活動が続けていた私は、なんとか中規模の不動産会社の経理職につくことが出来た。高島製菓の事件以来、苦手になった面接は二回。小さい会社なだけあって、最終面

接には、大柄だけど温かみのある社長も同席していた。

志望動機に対する質問にも、今回はうまく答えることが出来た。これは由希と再会したおかげだった。由希が別れ際に言っていた、自分の為ではなく、応援してくれるみんなのために歌っているというセリフが、私の心の隙間に、ひっそりとだが、確かに留まっていたのだ。

私は、面接の時に自分勝手な受け答えしか出来ていなかった。今まで将来税理士として独立したいから、まずは企業の経理をと、自己成長の方に意識が傾いていて、自分のことしか考えていなかったのだ。会社のために働く視点が完全に欠落していたことに、由希の言葉をきっかけに今更ながら気が付いたのだ。

最終面接では、社長がその場で内定の旨を伝えてくれて、一緒に頑張ろうと、微笑みながら語りかけてくれた。

この社長のために頑張ってみた。ほんの少しでもそう思えたことが、なんだか大人になれた気分で嬉しかった。

「いやー、本当によかったねえ。でも、地元の会社にはやっぱりしないわけ？ せっかくこないだ、戻ってきて就職活動もしてたじゃないの」

内定報告の電話とすると母さんは、地元に戻らない身勝手な娘に愚痴を言いつつも、少し涙ぐみながらお祝いの言葉を並べてくれた。

「それほどのことじゃないじゃないよ」

私は、相変わらず素直になることは出来なかったが、今まで積み重なっていた重圧から開放されていることが実感出来た。久しぶりに味わう心地よさ。母さんの言葉と一緒に、私の心には新鮮な空気が吹き込んできた。

「ちょっと待つてね、お父さんにも代わるから」

母さんはそう告げると、受話器を置き、父さん呼びに行った。たん、たん、と、廊下に響く可愛いスリッパの音が受話器越しに聞こえて来た。

珍しい。日曜日はいつもゴルフに行くはずなのに、今日は家にいるらしい。しばらくすると、再び母さんのスリッパの音が聞こえて来た。私の身体に一筋の緊張感が走る。

「おう、奈緒子か。まずは、実務経験だもんな。俺は覚えているぞ。頑張れよ」

電話に出るなり父さんは、たたみ掛ける様にそんなことを言ってくれた。驚いた私は、うまく返事を返すことが出来なかった。

頑張ると、繰り返し同じ言葉を発した私は、慌てて最近始めた塾のアルバイトの話をして、その電話の間をなんとかもたせることに奔走した。

ひとしきり話が終わり、私はゆっくりと受話器を置いた。喧騒の過ぎ去った、いつもの静かな空間感を味わう。そうすると、まだ心臓が驚いたように、普段よりも早いスピードで脈打っているのがはっきりと分かった。

これは本当に意外だ。

今の税理士事務所を私に継がすのを拒む父は、東京の大学に行くのすら反対したのだった。男が働き、女が家庭を支える。母さんのような素敵な女性になれよと、恥ずかしげもなく豪語する父に、反発して勉強を頑張ってきたのも事実だった。

大学3年間、特に税理士に向けた努力が出来ていなかった私を見て、きつと悩んでいたことを悟ってくれたのだろう。

私は、小学生の頃家族で行った遊園地の写真に手を伸ばした。母さんが、私の部屋に遊びに来た時、写真たてまで用意して持ってきた代物で、私は恥ずかしいからやめてくれと懇願したけれど、今も捨てずに電子レンジの上に飾ってある。

父さんは家で笑うことは珍しいが、この写真は満面の笑みで、私のことを抱きかかえている。その横で、母さんが父さんの肩に顔を寄せている。その時の母さんの表情は、幸せそのものだ。

父さんの応援の言葉。

私が一番欲しかった物は、これだったのかもしれないな。

税理士をもう一度目指すのもよし、母さんのような家庭を大切にする女性を目指すのもよし、今一度なりたい自分を考えてみればいいだけじゃないか。

夢を追いかけている人に対する、嫉妬からくる嫌悪感に苛まれていた私は、浮かび上がる心の変化に少し戸惑いつつも、視界が明瞭に

なっていくことを感じた。それと同時に、私はものすごい過ちをしたことに気づいた。

由希。

由希は許してくれるだろうか。ちゃんと今の想いを伝えたい。確か、由希の初ワンマンライブは夏の終わりと言っていた。

私は、慌ててパソコンに向かい、三角由希と打ってみた。

ヒットした件数は20件。その中に、由希のホームページを発見した。

由希の好きな淡色をベースとした、シンプルだが可愛いホームページで、ライブ情報や、日々の出来事を書いているブログへのリンク先が乗っていた。

ビデオの録画すらろくに出来ない癖に、本当に頑張っているんだな。私は、由希の頑張りをむげにした自分に対して、ますます嫌悪感を感じた。

ライブ情報の項目をクリックすると、こないだ言っていたワンマンライブの情報が掲載されていた。

9月9日だ。明後日だから、まだ間に合う。会場に目を移したときに、私は目を疑った。

ライブハウスHappyRootz。

私たちキャサリンの、解散ライブをした場所じゃないか。私は鼓動

が早くなるのを押さえることが出来なかった。

ワンマンライブの当日、私はカバン一つで東京の部屋を後にして、新幹線へ飛び乗った。前回とはまた違う種類の、大きな不安とそわそわした気分が交じり合う。なんて話しかければ言いのだろう。そもそも、由希は唄を歌っているのだから、私の存在に気づかないかもしれない。

実家に帰ると面倒なことになるので、直接会場に向かった。実に、高校生以来のHappyRooTz。歓楽街の隅にある、雑居ビルの2階に位置するこのライブハウスは、普通に生活していたら絶対に目に留めない場所なのだが、店内はさまざまなアーティストのライブ中の写真や、アンティークのような古楽器、煉瓦造りの壁に彩られ、音楽の素晴らしさが溢れ出す空間を演出する格好のステージになっている。

入口に向かう階段で、私は行ったり来たりしていた。そういえば、お金が足りないかもしれない。少しふらつきながら階段を下りて、近くのコンビニに引き返し、ATMの前に立ち、財布の中身を確認すると充分ライブに参加できる金額を持っていることに気がついた。

最初になんて声をかけようかな。朝から何度も私の心に問いかけたが、気の利いた妙案は一向に聞こえてこない。

再び会場に視線を落としながら歩いていると、目の前に大きな影があることに気付いた。見上げると、無精ひげを生やした大柄の男の子。ただでさえ大きいのに、ぶかぶかの迷彩色のスボンを履いて、灰色のパーカーのフードを被っている。杉山くんか。手には、今日

の由希のワンマンライブのチラシを持っていた。

「わあ。杉山君じゃん。由希から聞いてはいたけど…、ますますおつきくなったね。私が高校卒業して以来じゃないの」

旧友に会って心が高揚している私とは反対に、杉山くんは厳しい視線を変えなかった。

「高校卒業以来なのは、誰のせいだったの。奈緒子さん全然地元に戻ってこないし、全然由希さんと連絡とってなかったでしょ。しかもなにさ、初のワンマンライブなのに手伝いなかよ。受付は遠藤、会場設営は森がやってるんだぜ？さっき由希さんに聞いたら、奈緒ちゃんに一言物申すとか言ってたからね。奈緒子さんにこのラ イブ聴く資格なし！」

そういうと、杉山くんはチラシを配りにずっと戻っていつてしまった。いつもは喧嘩したり聞き流していた、相変わらず口の悪い杉山君のセリフが、今日ばかりはまっすぐと私の心に突き刺さる。彼がいつものように冗談で言っているのは頭ではわかっていたものの、私の足は、Happy Rootzの入っている雑居ビルを素通りしてしまった。

今年一番の大きな溜息をつきながら、ふらふらと街中を歩いた後に私は少し休もうと喫茶店に入った。この喫茶店も、よくバンドメンバーで、学校の帰り道に寄った思い出の場所の一つだ。

数年ぶりに来たが、支配している空気感は、当時そのものだ。世の流れに反抗するような、煙草の匂いが充満した空間。この匂い

が、昔ヒットした洋楽と素敵なコラボレーションをしていて、訪れる人の気持ちを掴んで離さない。

しばらくすると、期末テストの勉強をみんなで行っていた日々が、昨日のように浮かび上がってきた。そういえば、進学校だというのは、勉強に真摯的に向き合っていたのはメンバーの中で私だけだったため、私はいつもみんなの先生役だった。

お気に入りだった角のテーブルに腰をかけ、私はブラックコーヒーを注文した。直接会場に向かったため、鞆には下着類や歯ブラシなどもすべて入っている。その大きな鞆の中から、「元気チョコステイック」が顔を出した。昨日、必死に東京の駄菓子屋さんを巡り手に入れたこのいちご味は、由希への贈り物だ。遠足の時、新発売のいちご味を由希にあげて、いちご好きで意気投合したことを、私は今でもしっかりと覚えてる。

店員さんが運んで来てくれたコーヒーを飲みながら、片一方の元気チョコステイックの封を開け、ばれない様に一口サイズにちぎってそれを口に運んだ。食べた分だけ、涙がこぼれてきた。

「全然、元気でないんだけどなあ」

ぼそつと、思わず声を出してしまう。でも、確かにあの時は、元気をくれたんだ。由希が笑ったところを見たのは、あの遠足の時が初めてだったな。

その時、勢いよく扉が開く音がした。はっと入口の方を見る。

「何やってんだ。もう始まってるっつーの」

杉山くんだった。

一歩先を早歩きで歩く杉山君に置いていかれないように、私は街の中を時たま走りながらついていく。

「資格がないと生意気な後輩に言われただけで、本当に来ない奴がいるかなー」

後ろからも、汗が滴っているのがはっきりわかる。ずっと私を探してくれていたようだ。申し訳ないなと思いながらも、私は嬉しかった。

雑居ビルに到着して、2階に駆け上がる。受付にはキャサリンのドラムを担当していた遠藤君がいた。

「遅刻者は、みんなの飯代を奢るんですよ。ルールはあの時と変わっていませんから」

遠藤君は、ニヤツと、変わらない笑顔で私に頬笑みかけてくれた。

恐る恐る扉を開く。自分の鼓動が聞こえてくる中、熱気が私の頬を通り過ぎた。そしてその瞬間、由希の力強い歌声が、瞬時に聴こえてきた。暗くてはつきりは分らないが、50人ぐらいの人がいるようだ。席に座って、聴いている人。後ろで立ってビデオ撮影している人もいる。会場の奥にいるギターの森君が私に合図を送ってくれた。一番隅に空席。私のために、空けておいてくれたのだろうか。

すごいな。ここにいる人達は、みんな由希のファンか。私は…今ま

で何をしていたのかな……。私を苦しめていたこの感情が、再び疼き私の心に攻撃を始めた。しかし、この感情は、由希の音楽の波によって次第に洗い流されていった。

私も由希のファンに戻ろう。

高校三年生の受験生の時、今まで一度も親に反抗したことがなかった私は、ケンカをしてまでバンド活動を始めたのだ。どうしても、近くで由希の歌声を聴いていたかったからだ。テニス部の大会メンバー発表の帰り道、補欠になった私達は二人でカラオケに寄り、先輩の馬鹿やローと声を枯らして叫んで、その時初めて由希の歌声を聞いたのだ。遅い由希のカラオケデビューの、懐かしい青春のページ。今思えば、アーティスト由希の第一号のファンは私なのだ。

相変わらず、由希の歌声は素晴らしかった。子供っぽいし、実際私達はまだまだ子供なのだけれども、唄を歌っている時は妙に大人っぽい。聴きに来ている人々の手拍子で、ライブ会場は熱気に包まれている。私も、気持ちを込めて小さく手拍子をして、唄う由希を見守った。

「最後は、新曲です」

会場からは、この日一番であろう大きな拍手が巻き起こった。

「これは、何もとりえがなくて塞ぎ込んでいた私を救い出してくれた友人のために、作った曲です。子供の頃からお父さんの仕事を継ぐという夢を持っていた彼女は、友達を作るのが苦手な私を部活に誘ってくれて、そこからひょんなことから音楽を始めることになりました。その子がいなければ今の私は絶対にいなかった。今その人

は東京の大学にいて、少し疎遠になってしまっているけど、まだ一度も素直にありがとうって言えてないけど、その感謝の気持ちをこめて歌います。聴いてください」

「友達」というシンプルな題名の曲は、歌詞も素直な内容で、私に対する由希の感謝の気持ちで満ち溢れていた。

私は、涙が止まらなかった。そこまで大切に思ってくれているなんて、私は全く知らなかった。

こないだ、私はなんてひどいことを言ってしまったんだろう。なんて、情けない姿を見せてしまったんだろう。でも、由希のおかげで私は今やっと前を向いて歩けるようになったよ。はやく、そう由希に伝えたかった。

由希も、歌いながら少し涙ぐんでいるようだった。それを暖かく見守る、お客さんも素晴らしく思えた。

二人の涙で、美しく彩られた空間は、夏の終わりを暖かく迎えたのだった。

第三章 ライフ（後書き）

小説家川和真之の、記念すべき人生初作品です。これを原点に、よりよい作品を作り上げていきたいです。頑張ります。

第一作品目ということで、文章リズムとか、表現とか本当にまだまだと感じておりますが、書きたいテーマはこれです。

この物語を読むことで、「夢」「友情」に対して今一度想い返すきっかけになっていたら、僕にとってこの上ない喜びです。

感想・指摘・激励、なんでも受け付けております！！

川和真之のHP><http://magickmarket.jp>
[bindsite.jp](http://magickmarket.jp)<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6802p/>

CANDY POP

2010年12月30日22時47分発行